

讃美歌21 478

- 1 どんなものでも この私を
神より離すことはできない。
朝に夕に み手を伸ばして
私を守る 神の恵み。
- 2 たとえこの世の 人の愛が
私を見捨て 裏切るとも、
罪と死との 鎖をほどき
救うみ神の 恵みがある。
- 3 たとえ悩みに 沈むときも
み神の愛に より頼もう。
私の身も 魂もみな
み神のもとに あるのだから。
- 4 痛み苦しみ 世に満ちても、
やがてこの世は 過ぎ去りゆく。
主キリストに 私が出会う
その喜びは 永遠につづく。
- 5 世界と人の 造りぬしに
恵みにみちた 神のみ子に
私たちを みちびく霊に
永遠にかかわらず 栄光あれ。

EG365 T/Ludwig Helmbold

M: Lyon / Erfurt

- 1 [Von Gott will ich nicht lassen, denn er lässt ,nicht von mir, führt mich durch alle Straßen, da ich sonst irrte sehr. Er reicht mir seine Hand; den Abend und den Morgen tut er mich wohl versorgen, wo ich auch sei im Land.](#)
- 2 Wenn sich der Menschen Hulde und Wohltat all verkehrt, so find't sich Gott gar balde, sein Macht und Gnad bewährt. Er hilft aus aller Not, errett' von Sünd und Schanden, von Ketten und von Banden, und wenn's auch wär der Tod.
- 3 Auf ihn will ich vertrauen in meines chweren Zeit; es kann mich nicht gereuen, er wendet alles Leid. Ihm sei es heimgestellt; mein Leib, mein Seel, mein Leben sei Gott dem Herrn ergeben; er schaff's, wie's ihm gefällt!
- 4 Es tut ihm nichts gefallen, denn was mir nützlich ist. Er meint's gut mit uns allen, schenkt uns den Herren Christ, sein' eingebornen Sohn; durch ihn er uns bescheret, was Leib und Seel ernähret. Lobt Gott im Himmelsthron!

5 Lobt ihn mit Herz und Munde, welchs er uns beides schenkt; das ist ein sel'ge Stunde, darin man sein gedenkt; denn sonst verdirbt all Zeit, die wir zubringn auf Erden. Wir sollen selig werden und bleibn in Ewigkeit.

6 Auch wenn die Welt vergehet mit ihrem Stolz und Pracht, nicht Ehr noch Gut bestehet, die wir so groß geacht': wir werden nach dem Tod tief in die Erd begraben; wenn wir geschlafen haben, will uns erwecken Gott.

7 Obwohl ich hier schon dulde viel Widerwärtigkeit, wie ich auch wohl verschulde, kommt doch die Ewigkeit, ist aller Freuden voll, die ohne alles Ende, dieweil ich Christus kenne, mir widerfahren soll.

8 Das ist des Vaters Wille, der uns geschaffen hat. Sein Sohn hat Guts die Fülle erworben uns und Gnad. Auch Gott der Heilig Geist im Glauben uns regieret, zum Reich der Himmel führet. Ihm sei Lob, Ehr und Preis!

「待ち望む世界」

詩篇 130(1-)5-7

「(主よ、深い淵から、私はあなたを呼び求めます。)・・・私は主を待ち望みます。私のたましいは待ち望みます。主のみことばを私は待ちます。私のたましいは、夜回りが夜明けをまことに夜回りが夜明けを待つのにまさせて、主を待ちます」

詩篇130を今日のチャペルの聖書に選びました。ところが先週の「捨てた石、かなめの石」(詩篇118篇22節)と、どういう関係があるのか、私は深く考えませんでした。そうでなくても、先週は、オンラインのチャペルに雑音が多く、ご迷惑をおかけしたことをお詫びします。

実は、詩編113篇から、詩篇118篇までは、ユダヤ社会では、「過ぎ越しの食事」の前に歌われる箇所なのです。おそらく、第113篇と第114篇は、食事の前に歌われ、115篇から118篇までは、食事のあとで歌われました。ですから、これらの詩篇の歌が、イエス様が捕らわれる夜の出来事に深くかかわっているのです。

ルカによる福音書(14:26)で、最後の晚餐を終えたイエス様と弟子たちが、「そして、賛美の歌を歌ってから、皆でオリーブ山へ出かけた。」とあります。そこで、「あなた方は、皆つまづきます。『私は羊飼いを打つ。すると羊は散らされる』と書いてあるからです。」と語られています。

では、詩篇130篇とは、どういう箇所なののでしょうか。先週のチャペルで読んだ詩篇118篇は、過越の祭に読まれた箇所の最後の部分でした。この118篇に、「捨てられた石、礎の石」が語られていました。(詩篇118:22-24)。

この記憶がなければ、3つの福音書に共通して「捨てられた石、礎の石」が、それぞれに登場するということはなかったのではないかと思います。これが、イエス様の苦難と、神様の助けを象徴するからなのです。

第118篇を歌いながら、イエス様と弟子たちは、エルサレムのシオン門を出て、緑の多いゲッセマネに向かったはずです。過越の祭に歌われた詩篇は119篇で終わります。この詩篇119というのは、ヘブライ語のアルファベット(22字)で始まる歌で、詩篇のなかで、最も長いものです。

これに対し、続く詩篇120-134は、「都上りの歌」と呼ばれています。その中心は、エルサレムに向かうダビデが神様に語りかける祈りです。しかし、公的な祈りとして編集されたものには、ダビデ以外の人々の祈りも含まれていると考えるべきです。

実は、詩篇130篇は、「悔い改め」の詩篇の一つとして知られています。新改訳聖書では、神様への呼びかけの言葉が顕著です。130篇1節の「深い淵から、あなたを呼びもとめます」に注意してください。そして、5節の「私はあなたを待ち望みます」が重要なのです。

新型コロナウイルスの危機を超えるために、いろいろな分野で努力が続いています。その一部は、急速なワクチンの開発と普及によって、人類の希望をつなぎとめています。皆さんにも、接種機会が一日も早くめぐってくるように願っています。

いずれにせよ、科学技術は、自然科学であれ社会科学であれ、人類が生き延びるために、これらを追求しなければならないという任務と宿命を負っています。

同時に、科学技術における競争は、ますます先鋭になっています。情報通信技術であれ、バイオ技術(特に遺伝子工学)であれ、温暖化を抑制するエネルギー技術であれ、その変化の急速さが驚きであるうえに、これが、経済や社会、人間の生活や命に与える影響はわからないままです。

そもそも、科学的な手法で、世界がどのように変わるのか、そして、未来を予測できるのかについて、ますます不確実性が増しているのです。

生き延びるために、ますます忙しくなる人々の生活。 そのような生き方こそ、私たちが「深い淵」に陥れ、お互いのことを理解しようとする気持ちを奪い、自分しか考えない、神なき世界をますます、拡大させるでしょう。

神様。私たちに深い淵から救ってください。どんな苦難のなかでも、あなたのみことばによって、絶望せず勇気をもって生きられるように。 どうかイエス様、来てください。